

生きる「きしみ」を俳句に78年間!

●同窓の岡野浩さんが高得点句に!

春日部市を代表する人物として、近年では親善大使が有名で、脳科学者の茂木健一郎さん、きょう漆芸分野の人間国宝・増村紀一郎さん、お笑いタレントのビビる大木さん、元ボクシングチャンピオンの内山高志さん、さらに、シンガーソングライターのあえかさんと太田裕美さん、気象予報士の平井信行さんと井田寛子さん、サッカーの佐藤寿人さんと佐藤勇人さん、バスケットボールの渡嘉敷来夢さんが挙げられます。皆さん、春日部市出身者であったり、在住者であります。

皆さんが現代の著名人であるならば、かつての人物としては、小説家で『雪之丞変化』などで有名な三上於菟吉さん(1891~1944)、俳人の加藤楸邨さん(1905~1993)が有名です。今宵は、そんな加藤楸邨さんのお話です。先日の新聞に次の記事が…。

◇ ◇

◆加藤楸邨創刊の「寒雷」終刊

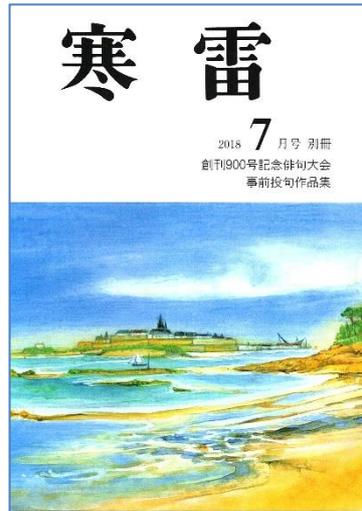
生きる「きしみ」を俳句に 【朝日新聞】

戦後俳壇を代表する俳人で、朝日俳壇の選者も長く務めた加藤楸邨(しゅうそん)が創刊した俳句誌「寒雷(かんらい)」が78年の歴史に幕を閉じる。6月末発行の7月号(通巻900号)が最終号となった。▼「寒雷」は1940年、「伝統の尖端(せんたん)に我々の新しい歩みを常に据えてゆきたい」(41年発行の「寒雷」から)との志で楸邨が創刊。金子兜太や沢木欣一、森澄雄らも参加し、社会性俳句など多様な作品の発表の場になった。93年に楸邨が亡くなって以降は、主宰者を置かず同人会が運営していた。一般投句の選者は、楸邨の次男の妻である加藤瑠璃子さんが務めた。▼「俳句界」編集長で楸邨に師事した河内静魚(せいぎょ)さんは「人が社会で生きていく上でのきしみや嘆きを五七五の落とし込むのが『寒雷』の精神。今のような世の中で、『寒雷』の名が消えるのは寂しい」と終刊を惜しんだ。▼8月号からは、寒雷同人会が新たに「暖響(だんきょう)」という誌名で後継誌を発行する。これまで「寒雷」の編集長だった俳人の江中真弓さんが投句の選者を務める。江中さんは「楸邨の俳句理念を継承、発展させる活動を、新誌でも続けていきたい」と話している。(樋口大二)〔6月30日〕

◇ ◇

◆加藤楸邨:人間探求派と称される俳句で知られる俳句雑誌『寒雷』を創刊・主宰した。昭和4年(1929)から昭和12年(1937)旧制粕壁中学校の教員時代、俳句を作り始め、俳人の水原秋桜子に師事、楸邨俳句の出発点を過ぎた。【埼玉県/埼玉ゆかりの偉人データベースより】

実は、「寒雷」の最終号については、加藤楸邨さんの孫弟子にあたる岡野浩さん(春日部地区浦高会会員、10回)から数ヶ月前にお話を伺っており、6月3日と4日に「寒雷・創刊900号記念」の式典と俳句大会が開催されることも伺っていました。



俳句大会は、事前投句で177名から833句の投句があり、暖響作家全員に特選1句と入選10句を選んだいただいたところ、133名の作家の方々により選句していただいたそうです。

そんな中で、岡野さんの句が2名の特選、20名の入選で22点の高得点を得て、高得点句1位となっ

たことを教えていただきました。その句は…。

「種子蒔きて待つといふ日の始りぬ」

でした。岡野さんが投句された他の句では…。

「夕立の来さうな気配風にほふ」

「情熱の炎を燃やす鶏頭花」

「色いつさい省きて黒し寒鴉」

投句された全てが入選を受けていて素晴らしい成績だったようです。

◇ ◇

加藤楸邨さんの代表句に…。

「かなしめば鴉金色の日を負ひ来」

直訳すると「悲しんでいたら、夕日を背負い金色に輝く鴉(もず)が私のもと飛んで来た。」という感じでしょうか。昭和10年ごろの作品。2年ほど前に次女を疫病で亡くしています。

「翳雲人に告ぐべきことならず」

日本が戦争に向かい始めた時期に詠まれた一句です。言われてみれば、そんな空気感もあります。楸邨は中学校の教師でした。

「天の川わたるお多福豆一列」

79歳のときの作品。晩年になり大きく句柄が変わったといわれていますが、生涯を通じて前衛だったのかもしれませんが。

楸邨の俳句の材料は、自分の中のわだかまりや憤り、そして孤独感です。おそらくそれらを変換もしくは断片化しています。裏を返せば、人として明るくあるための「負との対峙」、そこに視点を据えたものこそが楸邨の俳句なのかもしれません。

【俳句ストック(シラクム)より】